

<論文>

東日本大震災はいかに語られたか 2011年度学校礼拝説教の調査分析

松 本 周

研究の視座と目的

本稿はキリスト教学校礼拝における「東日本大震災」言及についての調査研究である。2011年3月11日に発生した大地震とそれによって引き起こされた災害は「東日本大震災」と総称され、「未曾有の」や「千年に一度の」といった形容を伴って語られる大きな歴史的経験となった。甚大な被害に直面した日本社会では「ことば」を巡り、二つの現象が表出した。一方では従来知見や状況描写では表現できないほどの災害であるとの意識から「言語喪失」が言われ、他方ではこの時にこそ「ことば」の力を信頼し表現を結集してこの歴史的な経験を語り継承していこうと志し、東日本大震災を言い表す多様な言説が現れた。

キリスト者からも聖書に立脚し、東日本大震災をふまえた様々な発言がなされた。それらを内容的に分類すると、①「神がいるのになぜ」「神はどこにいるのか」などの神義論に関わるもの、②被災を通して浮き彫りになった現代社会の問題性指摘や文明評論に属するもの、③被災者の悲嘆経験およびグリーフケアに関するもの、に大別される。これらキリスト教からの発信は多くの場合に教会を基盤とし、発言者本人の信仰思想に立脚したものである。

では、キリスト教学校という場で東日本大震災はどのように語られたのであろうか。上の三分類に対応する語りが見出せるであろうか。キリスト教の立場から東日本大震災に言及する多くの書籍や刊行物があり¹、それらは本論考に対する先行研究としての位置も有するが、「キリスト教学校」に焦点を当てたものは少ない²。しかしながらキリスト教学校こそ、建学の理念で

¹ 例を挙げると、林尚志『石が叫ぶ福音』（岩波書店、2011年）、荒井猷・本田哲郎・高橋哲哉『3・11以後とキリスト教』（ぶねうま舎、2013年）、福島県キリスト教連絡会編『フクシマのあの日・あの時を語る』（いのちのことば社、2013年）、山形孝夫『黒い海の記憶』（岩波書店、2013年）など。

² 被災地の各キリスト教学校は発災時状況及び対応を記録に残している。『学校法人宮城学院 東日本大震災の記録』（平成24〔2012〕年）、『東日本大震災と東北学院』（2014年）、『仙台白百合女子大学 東日本大震災の記憶』（2021年）、『尚綱学院大学 東日本大震災10年間の取組み』（2022年）など。貴重な証言が多数記録されているが、学校礼拝の語りは直接収集されていない。また「キリスト教学校」に焦点を当てた刊行物としては、日本基督教団救援対策本部編『現代日本の危機とキリスト教』（日本キリスト教団出版局、2011年）に所収のキリスト教学校の視点からの発題、キリスト教学校教育懇談会編『キリスト教学校が東日本大震災から学ぶこと』（ドン・ボスコ社、2013年）などがあるが、やはり学校礼拝説教について直接に取り上げられてはいない。

自覚的にキリスト教の立場を明確にしている一方、非キリスト者である多くの教職員と協働し、未信者である多くの生徒・学生を迎えている共同体として、いわば教会と社会を架橋する位置にある。そして「礼拝説教」に着眼する時、教会の礼拝では会衆の信仰的意識を前提とした教義学的語りが通用するのに対して、キリスト教学校礼拝での聴衆は必ずしもキリスト教信仰は自明ではない。むしろ非キリスト教的社会の状況を濃く反映しているのがキリスト教学校礼拝の聴衆であり、そこでの礼拝説教の語りは、キリスト教弁証課題を負い、また現実社会の状況についてキリスト教信仰を前提としていなくても届く社会倫理的表現を伴って発話されることになる。そのような意味で教会と社会を架橋する、キリスト教学校の礼拝において「東日本大震災はいかに語られたか」を究明することは、日本社会とキリスト教との関りを考察するうえで重要な意義を有している。

特に福音主義（プロテスタント）キリスト教を建学基盤としている諸学校の礼拝で「東日本大震災」がどのように受け止められ、聖書やキリスト教信仰との関わりにおいて語られてきたのか。本稿では各キリスト教学校の『学校礼拝説教集』を収集し分析した。

なお、説教の分析には説教批判が伴う。説教批判の意義については加藤常昭による以下の指摘を参照しておきたい。「他者からの批判を受け入れ、また自分で自分を批判する道を習得しないままでは、説教者は自分に与えられた使命を十分に果たすことはできない。」³ 本研究での説教批判は、実際の語りを分析して神学的課題を見出し検討することにより、現在また将来における学校礼拝説教を、より適切に整えていくことに資することを旨とする。したがって本研究における分析と考察は、対象説教やその教育的機能が有する価値を減じるものではない。この点をふまえて説教を分析し、聖書の言葉＝テキストと東日本大震災状況＝コンテキストとの関わりを考究する。

資料収集の概況

北関東から南東北にかけて東日本大震災における直接的被害地域に立地する各校へ調査協力および資料収集依頼を実施した。結果は下表のようになった。

学校名	『学校礼拝説教集』	震災関係2011年度記録
A高校	作成なし	ボランティア活動等資料はあり
B大学	通常は作成	ただし2011年度説教集は作成せず
C高校	通常は作成	ただし2011年度説教集は作成せず
D中高	作成あり	
E大学	作成あり	
F高校	作成なし	キリスト教教育に関する資料保管なし
G大学	作成なし	キリスト教教育に関する資料保管なし

³ 加藤常昭『説教批判・説教分析』教文館、2008年、13-14頁。

なお A～G 校の所在県には、ほかにもキリスト教学校教育同盟加盟校が大学 2 校、高校 3 校、中高 1 校が存在する。ただし調査依頼に対して、「内陸部のため直接的な震災被害に該当しない」「コロナウイルス感染症拡大防止のため学外者の来校延期要請」等の回答があり、今回の資料収集はかなわなかった。また「学校礼拝説教集は作成しているが、東日本大震災への直接的言及がなされたものは、影響の多面性に鑑みて収録していない」との返答もあった。さらに表で示したように『学校礼拝説教集』を作成しているものの 2011 年度は作成していないと回答した学校が二件あった。3 月 11 日から一か月経たずに 2011 年度が開始され、生徒・学生また教職員もそれぞれに被災者であり、学校施設等の安全確認も必要とされる学校運営の状況にあって、定期刊行物の作成も困難であったことがうかがえる。

以上の経緯により、本稿での具体的な説教分析の対象は D 中高と E 大学の学校礼拝説教集となった。なお中高生と大学生とでは、それぞれの段階における言語世界の相違、学校生活やカリキュラムにおける礼拝の位置づけの相違などがあり、また説教者も聴き手の理解度を考慮して言語表現を選択する可能性が考えられる。その意味では、説教分析における中心的焦点の内容に拠っては中高と大学の礼拝説教を並列に論ずるのではなく、むしろ区別する必要がある場合もある。しかしながら本稿では世代を超えて社会全体が経験した東日本大震災の語りについての分析であるため、特に中高と大学それぞれの礼拝説教を区別して論ずることはしなかった。

2011 年度『学校礼拝説教集』収録内容について

D 中高⁴

	聖書箇所	奨励者	震災への直接言及	鍵語
1	マルコ 4:13～20	N.M.	なし	
2	マルコ 16:19～20 結び二	K.S.	なし	
3	マタイ 6:19～21	M.U.	あり	共に生きる
4	マルコ 16:1～8	M.S.	あり	想像力
5	Ⅱコリ 1:8～11	S.N.	なし	
6	マタイ 10:29	Y.I.	なし※	逆転の福音
7	なし	Y.S.	なし	
8	Ⅱコリ 12:5～10	M.K.	あり	弱さと強さ
9	マルコ 12:13～17	H.M.	なし	
10	なし	I.S.	あり	目に見えないもの
11	マルコ 14:27～31, 66～71	K.S.	なし	
12	マタイ 7:12	Y.I.	あり	痛みとの共有
13	マルコ 16:9～13	R.K.	なし	
14	マルコ 1:1～8	無記名	なし	

⁴ D 中高宗教部編『礼拝奨励集』2012 年、全 96 頁 (B5 判型)。

E 大学⁵

	聖書箇所	説教者	震災への直接言及	鍵語
15	使徒言行録20:31～35	N.M.	あり	与える
16	マルコ2:23～28	M.U.	なし	
17	詩篇88:9～13（関根訳）	M.S.	あり	見失われる
18	ヨハネ12:20～25	S.K.	なし	
19	マタイ14:15～20	J.M.	なし	

二校の『学校礼拝説教集』に収録された日常的な学校礼拝における説教／奨励は以上の通りである。なお No.7,10 説教については聖書箇所の記載がなく、本研究の目的である聖書テキストと状況コンテキストとの関係性を考察することが不可能なため、分析対象から除外した。学校礼拝で使用される日本語訳聖書については、分析対象とした二校とも新共同訳（日本聖書協会、1987年）であった。

説教テキストの分析

上述一覧表の中から説教テキスト内の文章レベルで東日本大震災言及があるものを抽出し、関係部分の引用および分析と考察を行なった。なお以後の引用部中〈〉表記は、引用文章の内容を指示するため論文筆者が付加したものである。

【No.3説教】 聖書箇所 マタイによる福音書6章19～21節

〈震災言及〉

「東日本大震災の被災地に広がる瓦礫の原に立って祈りをささげる人々の姿を、私たちは何度となくテレビで見ました。その時、その人たちは、津波で流されて死亡したり行方不明になっている、今は亡き肉親や友人と「共に生きて」いたのではないのでしょうか。私たちは、死者と「共に生きる」ことができるのです。時には、死者と「共に生きる」ことなしには、今を生きていけないのです。人間はさらに、未だこの世に存在しない人、これから生まれてくる人とも「共に生きる」ことがで〔き〕ます。東京電力福島原子力発電所の事故で被害を受けた人々の言葉や行動からは、そのことが強く感じられます。」

〈聖書テキストと震災コンテキスト〉

今日の礼拝の初めに読んだ「マタイによる福音書」の話は……未だ発見されていない「Q資料」と呼ばれる資料に含まれていたイエスの発言だと考えられています。「地上に富を積んではならない。富は天に積みなさい。」ということでしたね。……東日本大震災に遭遇した私たちは、「地上に富を積む」

⁵ E大学宗教センター編『礼拝説教集』2012年、全60頁（A5判型）。

ことの危うさ・はかなさを実感したことでしょう。苦勞して建てた家、親の代から住み続けた家の多くが、地震や津波で住めなくなってしまいました。この世の富、お金や財産と「共に生きる」生活のもろさを示しています。

これに対して、イエスが奨励している「富を天に積む」とは、いったい、どういうことなのでしょうか。

それは、我々が「共に生きる」相手として、盗まれもせず、さび付きもしないものを選ぶことを意味しているように思われます。その相手とは、時間的にも空間的にも（あるいは社会的にも）われわれの「いま・ここ」の対極、反対側にあるものではないでしょうか。先に述べた言葉で言えば、「いま・ここ」から出発して時間と空間を拡大していったとき、その先に存在する、私たちの言葉ではうまく表現できないくある存在です。そのような存在こそ、盗まれることもさび付くことも気にせずに「共に生きる」相手にふさわしいように思われます。

イエス自身は、そのく存在をさまざまな表現を用いて探求しています。

〈分析と考察〉

【No.3 説教】での鍵語は「共に生きる」である。この語を震災被災者が祈る情景と重ね合わせて、人間は死者とも未だこの世に存在しない人とも「共に生きる」ことができる存在であると提示する。なお聖書の当該テキスト自体には「共に生きる」の語は存在しない。

次に、聖書テキストにおける「地上に富を積んではならない」と「富は、天に積みなさい」を巡って、もう一度震災への言及がある。地震や津波によって家屋が破壊された事象が、地上の富のはかなさを表わすものとして語られる。そして「共に生きる」の語が接続され、「この世の富、お金や財産」をその対象とすることはほろいと述べる。

上述のもろさと対比して、「富を天に積む」ことが「盗まれることもさび付くことも気にせずに「共に生きる」相手」と同一視される。それを「イエスが奨励している」と述べるが、最終的に「富を天に積む」仕方で「共に生きる」存在が何者であるかは説教中で明示されない。

東日本大震災は、説教者が前提理解として述べる、地上に富を積む＝地震や津波で喪失される物質的財産と「共に生きる」ことと、富を天に積む＝時空間を超えた存在と「共に生きる」ことを対比する際の傍証として作用している。そのように語り手の論述を補強する例話的に東日本大震災に言及しているため、東日本大震災それ自体を対象化して神学的に論ずることや、震災被害者を直接対象とした聖書使信といった語りはなされていない。

【No.4 説教】 聖書箇所 マルコによる福音書 16章1～8節

〈聖書テキストの解釈と適用〉

ガリラヤは、イエスが上下関係を超えて活動し、悲しみと苦難の中にある名もなき多くの人々と出会った地方です。異民族の血が混じったガリラヤは、ユダヤの民族的純血と伝統を重んじる人々からは軽

蔑されていましたが、イエスの生涯においては縁もゆかりもある土地です。しかし、そのガリラヤでもう一度イエスに出会うという知らせが、「イエスここによみがえる」という復活の健全なメッセージです。もう一度ガリラヤに行き、そこでいろいろな人々と再び交流しながら、またイエスと出会う。人と出会って、イエスに出会うというわけです。そのことは、私たちの生き方を考えるヒントとなります。

〈震災言及〉

一人の人間が「生と死」の間を「往き還る」には、気の遠くなるような人出と時間の助けがなければなりません。人間という存在の不思議さにときどき頭の中が混乱することがあります。一人のために大勢の人が、人が人のためにお互いに存在を支え合うこと、与えられた「命」の大切さ、生きていることのすばらしさを日々味わっています。……しかし一方で、絶望して自ら死ぬ人もいます。震災直後、津波に襲われた人たちがぶるぶる震えながら、ある避難所にいたときのことです。避難している人たちはみな、必死に生存をかけていました。そのような緊張状態の中で、重苦しい空気の中で、子供が泣きました。無理ありません。でも、耳にさわる子供の泣き声に対して、「うるさい！」と誰かがどなりました。それを気にする若いお母さんがいました。彼女のご主人は津波にさらわれていきました。周囲に気を使って、そのお母さんと子どもは避難所を出ていきました。二度と避難所には戻りませんでした。その後、お母さんは子供を抱きかかえて海に飛び込みました。

想像してみてください。行き場を失ったそのお母さんの絶望を！

生きることは決して簡単ではない。もし私が避難所にいたら、「うるさい！」とまでは言わなくても、いやな顔をしたかもしれません。人間の集まる限り、社会のいたるところで、誰かが見落とされ、見失われてしまう恐ろしさがあります。地震・津波の後、親が学校まで迎えに来てくれなかった子供もいます。親子ともども無事でよかったのは何よりです。そういう子供は、親に抱きかかえられるようにして帰って行きました。でも最後まで、取り残された子供もいました。親が迎えに来なかったのです。

想像してみてください。親を失った子供たちの絶望的な孤独を！

〈震災言及と語りの結論〉

人は死んでどこへ行くのか。私たちにはわかりません。閑上港周辺を見渡せる日和山という小さな丘があります。そこには、いろいろな言葉が記されている慰霊碑が建てられています。「何もできなくてごめんね！」「私たちはあなたたちのことを決して忘れません！」「私たちを空から見守ってください！」「安らかにお眠り下さい！」……。それらは死者たちには届かぬ声かもしれません。それらの言葉に私に泣けました。けれども、強い風が吹く中、私は死者たちからの問いかけを聞いたような気がします。死者たちは私たちに問いかけているかもしれません。「私が死んで、あなたたちはなぜ生きているのですか？」と。その問いに答える能力を私たち人間は持ち合わせておりません。これは絶望的なほど事実です。しかし、その絶望的な事実を押し返していく力をどこに求めるのか。私は、それを人間の絆に求

めたい気がします。よく考えてみましょう。人の痛みや苦しみは、その人以外にはわかりようがありません。でも、残された人間にはできることがあります。それは、人の痛みに想像力を広げることです。そういうことならできます。

……人の抱えている修復不可能なトラウマに気づくためには、想像力が必要です。それは、「あなたが痛いから私も痛い！」という想像力です。あるいは、「共感」と言い換えてもいいと思います。共感、共に感じること（com-passion）が、命は一人のもの〔の〕ではないという絆を生み出します。人と人をつなぐものを華やかさや見た目目の見栄えの良さに求めるのではなく、むしろ、想像力を働かせて、つらさや弱さに求めたいものです。つまり、つらさや弱さを絆とすることです。これが実は、意外にも、あまり無理のない、あまり難しくない「維持可能な」「持続可能な」生き方です。生きることはつらくて難しいけれども、そういう思いが「持続可能な、安心して暮らせる安全な社会」の土台とならねばなりません。

〈分析と考察〉

【No.4 説教】で東日本大震災への言及は、地震・津波による人命の喪失、また生きることへ絶望した人々、そして死者からの「私が死んで、あなたたちはなぜ生きているのですか？」との問いとして表現される。これら絶望状況への「想像力」を持ち共生することの必要性が、聖書テキストの解釈を手掛かりに論述される。

聖書テキストにおいて、復活のイエスと会う場所として指定される「ガリラヤ」は説教者により「イエスが上下関係を超えて活動し、悲しみと苦難の中にある名もなき多くの人々と出会った地方」と定義される。さらにガリラヤにおける復活のイエスとの邂逅とは「いろいろな人々と再び交流しながら、またイエスと出会う」こと、すなわち人々との出会いの先でイエスと再会することであると提示される。このことが「一人の人間が「生と死」の間を「行き還る」には、気の遠くなるような人出と時間の助けがなければなりません」という理解と接続され、生きることの困難に直面している人々や生への絶望にある人々の痛みへの「想像力」「共感」こそが、命を絆としてつなぐ生き方として私たちに求められているとされる。

説教は死者からの問いに言及する。そして聖書テキストはイエスの復活を報告する記事である。そうであれば聞き手の側には、人間にとって死の絶望を超えて、あるいは死を経験してなおその存在と出会うことは可能かという問いが生ずる。語り手の論理からすると、死者からの問いに答える能力を人間は持ち合わせていない。そして、復活すなわち死を超えたイエスとの出会いは、「いろいろな人々と再び交流」することを通して生起する。したがって死者と私たちとの出会いを見出すためには、まず死者の痛みや苦しみへの「想像力」や「共感」を持つことであるという連関であろうか。大震災の後で私は「なぜ生きている」のかということについては、その災害を経験する以前とは違う「想像力」と「共感」の生き方へという筋道が提示さ

れている。しかしながら死の問題にどう向き合うかという事柄は、問いの形で残されている。この点はNo.4説教への疑問である。

【No.12説教】 聖書箇所 マタイによる福音書7章12節

〈震災言及〉

毎年10月になると、今年も「世界食料デー」の季節がやってきた、思い出します。「世界食料デー」は世界の食糧問題を考える日として国連が制定した日、それが毎年10月16日の「世界食料デー」です。……食糧問題を考えることは単に食べ物のことだけではなく、貧困～最貧国と言われる国・飢餓に直面している人の現状を知り、なぜそのような問題が起〔こ〕るのか、なぜ長期に渡りこの問題は解決しないのか、更には私達が知ると知らずとに関わらず先進国の日本ひいては自分自身がその問題の長期化に与えているマイナスの影響について知らなければなりません。

ただ、以前私自身が食糧問題を考えるとき、まずイメージするのはアフリカや南アジア、また南米や北朝鮮などの国々でした。

しかし今年の3月にはまさに日本にいる自分自身が「食べるものや水をどうやって手に入れるか」という食糧問題に直面することとなりました。

例えば私の場合

水道が止まり備蓄していたボトルの水も底をつきそうになったので、給水車による配給の列に並びました。地域全体が断水しているのに配給所が1箇所しかなかったため住民が沢山集まり長蛇の列、1000人近く並んでいたかもしれません。

しかし、人数の多さに給水車の水量が追いつかず中断、次の給水車がいつ到着するのかも分からず、水を手にすることなくやむなく帰宅しました。

また、水道が復旧しないのでお風呂もわかかせません。

〈震災コンテキストと聖書テキスト〉

これからは大震災を経験した者として、少しかもしれませんが今までよりも苦難のただ中にいる方達に対して共感し現実感と思いをこめた関わりが出来るようになる気がします。

…食べるものを送ってもらって行列しなくてよくなって安心した。

送ってもらったダルマストーブ、すごく温かくてホットできてうれしかった。

水を分けてもらえてすごくありがたかった。

一言のあいさつ・手紙・Eメール・会いに来てくれたこと、うれしかった。

今はまだ他の誰かの必要に向き合うのは難しいと感じる人もいると思います。

一人一人それぞれが、出来るときが来たら
 聖書にあるように
 …人にしてもらいたいと思うことは何でも、あなたがたも人にしなさい。

ある人は多くの不安を感じました。
 またある人は大きな苦しみ・痛みを受けました。
 今だから分かる
 あなただから分かる、行いに込められる思いがあります。
 「その不安な気持ち、分かるよ。」
 「その悲しみ、分かるよ。」
 「その辛さ、分かるよ。」
 「その苦しみ、分かるよ。」

…人にしてもらいたいと思うことは何でも、あなたがたも人にしなさい。

(中略)

…人にしてもらいたいと思うことは何でも、あなたがたも人にしなさい。

深い思いを込めつつ、イエス様は私達に言われました。⁶

〈分析と考察〉

【No.12 説教】では、聖書テキストにおける「人にしてもらいたいと思うことは何でも、あなたがたも人にしなさい」というイエスの言葉を、私たちの生活の中で実践する具体例として「世界食料デー」を挙げ、関連させている。さらに食糧に困窮する事態は主として発展途上国などでの事柄ではないかという一般的認識に対して、東日本大震災が認識を変化させる契機となったことを語る。断水が続き、生命維持そして日常生活に不可欠な水の不足を実際に経験した。それによって自分とは違う他の国・地域で生じているとそれまで考えてきた飢餓の問題が、実存的な意識となった。その経験は、「今までよりも苦難のただ中にいる方達に対して共感し現実感と思いをこめた関わりが出来るようになれる」と述べられている。その共感ほさらに、困難に直面する人々への支援にもつながっていくことが期待される。そこで聖書テキスト「人にしてもらいたいと思うことは何でも、あなたがたも人にしなさい」が接続され、イエスの語りかけが、聞き手一人ひとりへの語りかけとして現実化される。

なお、この説教が東日本大震災からまもなくの時期であり、被災地で語られていることを強く感じ取れる部分がある。

⁶ 説教文中の囲み文字による強調は、説教者本人によるものである。

「今はまだ他の誰かの必要に向き合うのは難しいと感じる人もいます。

一人一人それぞれが、出来る時が来たら

聖書にあるように

…人にしてもらいたいと思うことは何でも、あなたがたも人にしなさい。」

以上の語りにおいて、聞き手である生徒一人ひとりへの被災状況へと寄り添った教育的配慮が観察される。さらに次のような語りもなされる。

「ある人は多くの不安を感じました。

またある人は大きな苦しみ・痛みを受けました。

今だから分かる

あなただから分かる、行いに込められる思いがあります。」

この部分にも教育的配慮が観察される。被災当事者であり、家族や知人等も甚大な被災経験をしている生徒に寄り添う語りかけがなされる。困難を経験した人として、今度は困難に直面している人を支える役割をすることについて、支援の実践における「行いに込められる思い」の重要性が強調されているからである。

以上の観察の通り、この説教は聖書テキストにあるイエスの呼びかけを、震災時の状況へ適用することにより、聞き手一人ひとりが聖書の言葉を自分への語りかけとして受け止めるという構造になっている。その上で、多様かつ深刻な被災経験をしている生徒への教育的配慮がなされている。

なお、No.12 説教に対する批判的指摘は、聖書テキストの使用法についてである。聖書テキストとしてマタイによる福音書7章12節前半のみが説教内で繰り返し引用されている。しかしながらテキストのつながりを観察すると7～12節は次のように記されている。「求めなさい。そうすれば、与えられる。探しなさい。そうすれば、見つかる。門をたたきなさい。そうすれば、開かれる。だれでも、求める者は受け、探す者は見つけ、門をたたく者には開かれる。あなたがたのだれが、パンを欲しがると自分の子供に、石を与えるだろうか。魚を欲しがると、蛇を与えるだろうか。このように、あなたがたは悪い者でありながらも、自分の子供には良い物を与えることを知っている。まして、あなたがたの天の父は、求める者に良い物をくださるにちがいない。だから、人にしてもらいたいと思うことは何でも、あなたがたも人にしなさい。これこそ律法と預言者である。」7～12節に一貫する主題は、神が「良い物」の与え手であるということである。そこには「震災」として直面している現実と、神が与える「良い物」とはどのような関係にあるかということが問いとして生じる。また12節後半の「これこそ律法と預言者である」すなわち旧約の使信全体はこのことであるというイエスの宣言をどう解釈するのかという点も存する。これは説教における聖書テキストの位置づけはどのようなものであるかという問いを喚起している。

【No.15説教】 聖書箇所 使徒言行録20章31～35節

〈聖書テキストの説明〉

パウロは自分の伝道の年月を振り返り、エフェソなど、この地の教会のこれからを案じ、迫害や異端による分裂の危険を警告して、信仰を守るように促します。そしていかに彼が諸教会を愛し、心を砕いてきたか、そのためには何ものをも惜みず捧げてきた、と語ります。金銀の報いを望まず、生活費を自ら稼いだ、とまで言うのです。そしてそれはむしろ彼の喜びであり、恵みと感じた、としてイエスのことば、「受けるよりも与える方が幸いである」を引用するのです。

心をゆさぶるようなこの言葉はしかし、イエスの宣教と受難の生涯を記した4つの福音書のどこにもありません。パウロだけが伝える、貴重な言葉と言えます。これは、イエスの死後のパウロの時代、イエスの語録のような文書が何種類か存在していたことを示すかも知れません。

〈震災言及〉

「与える」ことの大事さは、深く温かい人間の行為として私たちの間で広く認識されていることではありません。2010年の歳末には、至る所に「タイガーマスク」が出現し、子供たちに無償でプレゼントが与えられました。さらにこの3月11日に東日本を襲った地震と津波の大震災に際しては、自らの危険を顧みずに高台への避難を放送し続けた女性、車椅子の人たちの避難のために走り続けた少年らが、自らの命を人々のために捧げたことが私たちの胸を痛めました。そして震災後、被災者支援のために実に多数の人々が、様々なものを捧げ、ボランティアとなりました。人々が進んで、喜んで「与えた」ことは間違いのないことです。

このように、無償で、報いを求めず、自らの財産や能力を他人の利益とすべく与える行為は、キリスト教の外でも、善なる行為として行われ、また勧められています。それらの行為はときに社会に知らされて、公に賞賛されたり、それを模倣する行為を促したりすることもあります。そしてそれをなした人、その行為を果した人々には、一種の満足感、あるいは晴れがましさが得られるものです。だとすると、そこにはともすれば、人が傲慢さにおちいる危険性が伴うのではないのでしょうか。それに、これらには、人の熱意が必要です。人間の弱さによって、それはしばしば長続きせず、そのために「与える」行為が強制されたり、やめると非難されることがおこり、行政が介入することが必要になったりしがちです。

〈聖書テキストの適用〉

私たちは人間の熱心さに基づかない、イエスの教えるところの「与える」行為に目を見据えなければなりません。イエスの言葉は、「与える」ことが「幸いだ」というのです。……パウロが、そしてキリスト教が大切に、「与える」行為の原型が、キリストがご自身を十字架に捧げた、という行為にあることを想起したいと思います。裁判にかけられる前日の食事前、弟子たちの足を、身をかがめて洗われた、という行為は、そのことの象徴でもありました。それは、すべての人類の救いを、神の子が「与えた」

ことにほかなりません。

私たちは、よろこんで、報いを望まないで、「与える」ことをしたいと思います。それがキリストを模倣することであり、さらに実はそうするならばキリストの復活という、究極的な報いが約束されていることを知っているなら、その行為は真に「幸い」なものとされるであろう、と思うのです。

〈分析と考察〉

【No.15 説教】においては、聖書テキストに基づいて「与える」という行為、生き方が「幸い」であると提示される。また「受けるよりは与える方が幸いである」との言葉は、パウロによってのみ伝えられていることが解説される。そして経済的に自活して伝道したパウロ自身の生き方が、イエスの言葉を実践するものであったと説明される。

続いて、震災時にこの聖書テキストを想起させた諸事例が取り上げられる。それらは賞賛に値すると共に、危険性も存することが指摘される。それは行為者が満足感を得ることにより「人が傲慢さにおちいる危険性」であり、さらには「与える」行為が強制される事態の危険性でもある。これらの問題は「与える」行為が「人間の熱意」に拠っているところに存する。こうした「与える」行為のあり方を吟味する視点として、聖書テキストがもう一度導入される。そこで「キリスト教が大切にす、与える」行為の原型が、キリストがご自身を十字架に捧げた、という行為にあることを想起したい」と述べられる。私たちが「報いを望まないで、与える」ことが「キリストを模倣すること」になり、そこには「キリストの復活という、究極的な報いが約束されている」と結論付けられている。

この説教の中での震災言及は、自らの命を賭して人命救助を実施した人々について、また被災者支援やボランティア活動などが、聖書テキストの示す「与える」ことに関連した行為の具体例として位置付けられている。なお説教の中で「与える」行為が強制されるという仕方での近年の「犠牲」批判⁷につながる指摘がなされている。その点も論じられなければならないが、神学的批判としてはさらにイミタティオ・クリスティの解釈問題が存する。キリストの十字架における犠牲が、倫理的行為の理想形として人間が模範とし反復すべき事柄であるかという点である。もしそうであるならばキリストの十字架における一回性および終局性と人間の模倣行為はどのような関係にあるのかという神学的問いも生じてくることになる。また結論部において、一方では報われることを求めない無償で「与える」行為が奨励されるのに対し、他方で「究極的な報い」としてキリストの復活が約束されていることが「幸い」だと述べられる点が論理的にどのように整合するのかという問いが残存する。

⁷ 代表的には高橋哲哉『国家と犠牲』日本放送出版協会、2005年。なお高橋は同書の中で、永井隆『長崎の鐘』をキリスト教信仰と「尊い犠牲」理解の結合として強く批判する。

【No.17説教】 聖書箇所 詩篇88篇9～13節8

〈震災言及〉

私たちは今、人と人をつなぐ「絆」があるとは思えない厳しい状況にあります。岩手県内や宮城県内の仮設住宅では、人知れず死んでいく孤独死も報告されています。被災者が孤独死に追いつめられることは、「絆」というものが、言葉としては流行しても、その具体的な形が被災地には行き届いているわけではないことを物語っています。17年前の1995年1月17日早朝の阪神・淡路大震災では、6434人の方々が亡くなりました。仮設住宅と復興住宅における孤独死は震災後16年間で914人です。平均すれば、毎年、約50名の孤独死があります。復興に向けての必死の努力にもかかわらず、今後の東北もそういう悲しい状況に直面することが予想されます。孤独死する人たちは、人間として死んだのではないように思われます。孤独死する人たちは、無用の長物として社会的に扱われているからです。孤独死する人たちは、世の中に存在していたにもかかわらず、生きてきたその歩みの痕跡さえ消され、覚えられることもありません。孤独死は、そういう意味では、世の中から見失われた死です。

ここにいる学生・教職員の皆さん！自分の足で仮設住宅を訪ね、一人暮らしの人に声をかけてください、「お見舞い申し上げます。私は何もできません。でも、とても心配しています。一緒にお茶を飲みながらお話をお聞かせください。生きていてください」と。そのようにして、言葉だけではなく、実際に自分で「絆」を作り出してください。自分が取り組むべき課題が見つかります。世の中の問題点が見えてきます。お決まりの大学の講義に出席しているだけでは、そういう大切なことはわかりません。

〈震災コンテキストと聖書テキスト〉

私は、亡くなった友人も含めて、そういう人たちが自分にとって縁もゆかりもある人たちになったことを今感謝しています。そういう思いは、私のキリスト教理解の基本にあります。そういう人たちを通してイエスに出会ったと言い換えてもいいです。……

最後に、本日の聖書箇所では、信仰の詩人が若い時からの重病で死を意識し、友人も離れていく中で神に訴え、神にすがっています。この詩人もまた、見失われた孤独死を迎え、「奈落の底」「暗き所」「忘却の国」へ行こうとしています。人間は見る影もなく死んでいきます。これは人間の限界です。「ただひとつ、求め得ないのは、死を遁れる道」と古代ギリシアの悲劇作家ソフォクレスが『アンティゴネー』（呉茂一訳、岩波文庫、1980年、29頁）の中で述べている通りです。「死」を遁れる道がないとすれば、残されているのは、苦境を神にぶつけるしかない信仰の詩人のように、自分を越えたものとの関

⁸ なお説教者により、関根正雄訳（原資料に書誌情報はなし）が朗読聖書として指示されている。「あなたはわが親しき友をわたしから遠ざけ、わたしを彼らの忌み嫌う者とされ、わたしは閉じ込められて、外に出られない。わが眼は悩みのために衰える。ヤハウェよ、わたしは終日あなたに叫び、あなたに向かってわが手を広げた。あなたは死者のために奇蹟をなし給うや、亡霊は起き上がって、あなたをほめ讃えようか。あなたの恵みは墓の中で語られ、あなたの真実は奈落の底で語られようか。あなたの奇蹟は暗き所で知られ、あなたの義は忘れの国で知られようか。」

係しかありません。最後はそこにたどりつきます。だからこそ、失望で終わるのではなく、自分で「絆」を創り出す「良い人」になりましょう。

〈分析と考察〉

【No.17 説教】ではまず、東日本大震災の状況が語られる。震災以降の社会では、阪神淡路大震災以後でもそうであったように多くの方が「孤独死」を迎えている。そのことは社会的課題である。こうした事態は「絆」の語が震災後の日本社会で「言葉としては流行しても、その具体的な形が被災地には行き届いているわけではない」。つまり命の危機に孤独に直面し、切実な仕方でも人との関わりやつながりが必要とされる人々へ届いていないことが指摘される。

真の意味での絆が存在しない社会状況へ向き合い、それを変えていくにはどうしたらいいのか。語り手は「私は、亡くなった友人も含めて、そういう人たちが自分にとって縁もゆかりもある人たちになったことを今感謝しています。そういう思いは、私のキリスト教理解の基本にあります。そういう人たちを通してイエスに出会った」と述べる。この自己のキリスト教理解を媒介として、震災後の社会状況というコンテキストと聖書テキストとを結合させる。聖書箇所における「わたし」は「重病で死を意識し、友人も離れていく中で神に訴え」ている状況と説明される。死を逃れられない人間は、最終的に「自分を越えたものとの関係」すなわち神との出会いを求める。そして説教の最終部は「失望で終わるのではなく、自分で「絆」を創り出す「良い人」になりましょう」との勧めで結ばれている。

この説教最終部は、先述のように震災状況と聖書箇所とが、語り手のキリスト教理解「そういう人たちを通してイエスに出会った」で媒介されるがゆえに出現する語りであると理解される。人間と人間との出会い、すなわち絆が結ばれることを通して、その先でこそ人間がイエスと出会うことになるという連関を語り手は考えている。したがって多くの方が「孤独死」に見捨てられてしまう社会状況にあって、その絶望を転換させていく方途は、私たちが人と人との「絆」を能動的に構築していくことが求められるというのである。ただし、語り手の論理の筋道においては「自分を越えたもの」と「イエス」は同定されるが、それが語り手以外の経験においても同様と言い得るかは問題である。人と人との出会いの先に生じる出会いは、イエス・キリストとは別の「自分を越えたもの」である可能性が論理的には排除されないのではないか？との疑問が生じる。

これは震災状況という社会的コンテキストと聖書コンテキストとを関係させているのが、語り手のキリスト教理解であることと関係している。聖書テキストに「あなたはわが親しき友をわたしから遠ざけ」（関根正雄訳）「あなたはわたしから親しい者を遠ざけられました」（新共同訳）と記されている。つまり「神が私と友人との絆を断ったのか？」あるいは少なくとも「絆が断たれることを神は許容したのか？」という神義論的問いも含めて、聖書テキストと震

災後の社会状況との「地平の融合」(ガダマー)は別様には考えられないであろうか。説教には論文と同レベルでの論理整合性や一貫性が求められるものではないが、聞き手の共有し得る一定の論理的連関が必要とされることもまた事実だからである。

「東日本大震災」を説教で語ることについての考察

前項では個別の説教について分析しつつ各説教の考察を行なった。この項では分析対象説教全体から、東日本大震災を「説教」で語ることに伴う課題について考察したい。

冒頭部で東日本大震災をふまえたキリスト者の発言内容を①神義論に関わるもの、②現代社会の問題性指摘や文明評論に属するもの、③被災者の悲嘆経験およびグリーフケアに関するものと三つに分類した。では対象説教での語りと三分類との関係はどのようになるであろうか。

【No.17 説教】が東日本大震災後の「孤独死」という社会的課題を中心に提起しており、②に分類される。【No.3 説教】と【No.15 説教】は震災での被災や、それに対する人々の対応を振り返り、それをふまえて、聖書テキストの意味を探るという連関において震災に言及され、上述の三分類とは直接に対応していない。また【No.4 説教】と【No.12 説教】は震災経験を経て私たちはどう生きていくかを語っている。この視座は語り手と聞き手が震災経験を共有しているところで成立するものであり、これらも三分類に直接は対応しない。

この分析結果すなわち、震災直後のキリスト者による発信の方向性と被災地キリスト教学校における発信内容との懸隔はいかなる理由によるのか。そこに浮かび上がるのは、東日本大震災についての対象化意識の差異である。同じキリスト者の発信であっても、日本社会全般に受信者を想定する活字媒体での発信は、東日本大震災を客体化した対象として捉えている。それ故に震災の意味を問うとか震災を通して文明論的テーマを問うという意識が生じる。それに対して被災地キリスト教学校での語りは、被災者として被災地の只中であって生きること、そして生きる意味を問っている。そこにあるのは東日本大震災を客体とする意識ではなく、日々の生活と学びの場それ自体が東日本大震災被災の場であるという意識である。

なおこの点については、被災地キリスト教学校での語りが年月経過により変化していったのか。被災地以外でのキリスト教学校礼拝では東日本大震災についていかに語られたのか。それら比較の視点を導入した分析が今後の課題となる。

そして本研究では「東日本大震災はいかに語られたか」と共に、もう一つ「どのようには語られなかったか」も検討課題である。この点で特徴的に見出されなかった語りは、原子力発電所事故に関わる事柄である。言葉としての言及は一回のみあったが、主題的に展開されてはいなかった。このことは何を意味するのか。一つの解釈可能性は、聞き手とその家族が多様な職業との関わりがあることへの配慮も含めて、社会的政治的に大きな意見の相違につながる事柄への言及が

避けられたということである。説教において状況コンテキストを取り上げる際の課題がこの点には存している。社会状況への発言が聞き手の理解を分断する可能性がある場合、説教では沈黙するほかないのであろうか。

この状況コンテキストと説教との関わりについて考える事例として、既出の説教とは別に二編の説教を取り上げたい。

【No.6説教】 聖書箇所 マタイによる福音書10章29節

〈説教の語り〉

人間の目には、死は、すべての終わりであるかのように思われます。一羽の雀の死を、いったい誰が覚えているでしょう。しかし、神は憶えておられる。その存在は、死してなお神の御前にあります。神による永遠のいのち、復活の希望の光が、この「一羽の雀」の話からも差し込んできます。

聖書は、このような《逆転の福音》に満ちています。」

「このことを信ずるならば、私たちは人生でどのような状況に直面しても、——文字通り最悪の状況に陥っても、なお希望がある、ということができましょう。

十字架の死という《最悪》を、復活という《最善》に変えることができる神。

この神以外のだれに、私たちは希望を託したらよいのでしょうか。

【No.8説教】 聖書箇所 コリントの信徒への手紙二12章5～10節

〈説教の語り〉

「本当にどうしようもなく辛いとき、自分ではどうにもならないような状況に陥った時、私たちは思わず神様に助けを求めます。この前の大地震の時、私は一人で室内にいたのですが、本当に怖くて、思わず「神様助けてください」と叫んでいました。また、自分の弱さを神様にさらけ出して祈ることで、そのつど力が与えられてきました。このように、神様に素直に自分の弱さや苦しみを告白することで、すぐには受け入れられないような辛い出来事や深い悲しみを少しずつ受け止めて、前に進んでいくことが出来ると思います。

【No.6説教】では引用部分そして説教テキスト全体を通して、文章のレベルでの東日本大震災への直接的な言及は観察されない。それにも関わらず、当時の被災地における学校礼拝でこの説教が語られた際に、聞き手は東日本大震災を想起させられる。「存在は、死してなお神の御前にあります」と語りかけられる時、「最悪の状況に陥っても、なお希望がある」と宣言される時、あの複合的大災害、多数の人命喪失に直面した私たちがなお、福音によって支えられ、生きる力を与えられることが明確に告知される。また【No.8説教】では「この前の大地震」とのみ言及される。しかし震災の具体的描写がないことでかえって、聞き手が個別に有している「すぐには受け入れられないような辛い出来事や深い悲しみ」を神に訴えること、祈りの交流から神

の支えと癒しが始まることが述べられる。私たちに救いを差し伸べる神の言葉への信頼が語られている。

二つの説教には、本稿冒頭で提示した三分類すべてが内包されている。①神義論に関して、神による復活の命の希望が提示されている。また、私たちの嘆きを聞き取り、共にいる支えとなる神を示すことを通して③グリーンケアとも結びついている。そして②現代社会の問題性指摘については、震災状況が詳らかに述べられていないことから、表面的には語りに含まれていないように見える。しかしながら説教分析の視点で捉えるとき、聖書の言葉によって現代社会の状況が深みから捉えられていることに気付く。悲惨な現実と直面してともすれば神を見失いがちな社会状況に対して、聖書の示す神への信頼にこそ私たちと世界の希望があるとの確信が述べられているからである⁹。

以上の分析から、説教で東日本大震災について語ることは、必ずしも被災の状況を詳述することではないと理解される。震災状況について沈黙ないし最小限の言及にとどめることで、逆説的な仕方で、聖書が有する使信が雄弁に、被災の中にある聞き手へ語りかける。ここには説教における聖書テキストと状況コンテキストの関係をめぐる根源的な課題がある。

説教は「〈神の名による言葉〉、〈聖書の言葉（カナンの言葉）〉、〈説教者の言葉〉、〈聞き手の言葉・時代の言葉〉の四つの言葉」¹⁰で構成される。大規模災害のような状況ではときに、〈聞き手の言葉・時代の言葉〉が圧倒的な現実感を伴って肥大化し、他の三つの言葉がそれに埋没させられるという事態も生じかねない。そうであるからこそ、〈時代の言葉〉が多弁され、それに引き摺られて〈説教者の言葉〉が過度になることへの自覚と抑制が説教者に求められる。さらに〈聖書の言葉〉と〈神の名による言葉〉が、痛み苦しむ一人ひとりまた社会と時代に何を語りかけているかを祈り聞き取る黙想が不可欠となる。聖書テキストが現実のコンテキストを照らし出し、神の視点からの真の現実認識と救いの希望を聞き手に伝達する。それこそが礼拝説教において目指される語りだからである。

最後に「学校礼拝説教分析」という課題について触れておきたい。従前の説教批判や説教分析は教会を場とした、伝道者による説教を対象としてきた。それと比してキリスト教学校礼拝説教は、聞き手の性格が教会礼拝とは異なっていること、また語り手もキリスト者ではあっても神学を専門

⁹ この点は東日本大震災後に、聖書学の立場から「聖書に収められた書物のひとつひとつが、幾度もの共同体の崩壊と危機をくぐり抜けて来た歴史を語る。その言葉は、混沌と闇の中で新しい世界の創造を指し示している」（福嶋裕子ほか『3.11以降の世界と聖書』日本キリスト教団出版局、2016年、6頁）と発言され、組織神学の視点から「キリスト教信仰に立った教育は、その教育を越えた「信仰」の意味を伝えます。試練の中での守りがあること、神がご自身の御子の命を注ぎ、一人一人をご自身との平和の中に迎え入れてくださった、それによって支持的基盤が与えられていることを伝える必要があります」（近藤勝彦『いま、震災・原発・憲法を考える』教文館、2015年、185頁）と述べられていることと軌を一にしている。

¹⁰ 加藤『説教批判・説教分析』54頁。

に学んだ牧師や伝道者に限定されているわけではない。そのような相違をふまえて、いかなる説教批判・説教分析が構築されるべきかが、今後の課題として残されている。

（本稿は日本キリスト教教育学会第35回大会 2023年6月10日、於：和泉短期大学における研究発表「東日本大震災はいかに語られたか 学校礼拝説教の調査分析」に大幅な加筆修正を加えたものである。）

※本研究は一般社団法人キリスト教学校教育同盟 2022年度研究助成（課題名「キリスト教学校における東日本大震災語りの調査研究」）を受けた。

How the Great East Japan Earthquake was Talked About: An Analytical Study of School Chapel Messages from 2011

MATSUMOTO Shu

The devastating earthquake and resulting disaster that occurred on March 11, 2011 came to be called the “Great East Japan Earthquake” and has been described as an “unprecedented” and “once in a millennium” event. It was a pivotal moment in Japanese history. While facing immense damage, Japanese society struggled to find the words to describe the experience, even as diverse discourses emerged that aimed to articulate the scale of the disaster. Turning to schools identifying as Christian, how did such communities grapple with the Great East Japan Earthquake? While numerous books and publications discuss the disaster from a Christian perspective, few focus specifically on how Christian educational institutions made sense of the disaster. Since Christian schools serve as a bridge between Christianity and the broader society by virtue of the fact that they employ many non-Christian faculty and enroll many non-Christian students, examining how the disaster was talked about within these spaces holds importance for increasing our understanding of the relationship between Japanese society and Christianity. This paper analyzes how the “Great East Japan Earthquake” was addressed in chapel messages at various Protestant schools. Through this, it examines the interrelationship between the words of the Bible, the text, and the situational context, the Great East Japan Earthquake. In doing so, it illuminates various ways the disaster was addressed and interpreted. Additionally, it considers *what was not addressed* about the disaster. In closing, the study discusses messages where the Biblical text is used to illuminate and reveal the deeper meaning of people’s lived realities.